大学･短大 統一地区　1 / 26

●試験開始の指示があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
●志望先の試験科目を下記の表により確認のうえ解答してください。
　複数志望している場合は，共通する科目を解答してください。

1．問題・問題冊子表紙等では試験科目名を下記のとおり表記しています。

科目名	表記	科目名	表記
国語総合・現代文Ｂ	国語	数学Ⅰ・数学Ａ	数学
コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ	英語	化学基礎	化学
日本史Ｂ	日本史	生物基礎	生物

2．問題冊子は表紙以下次の順になっています。

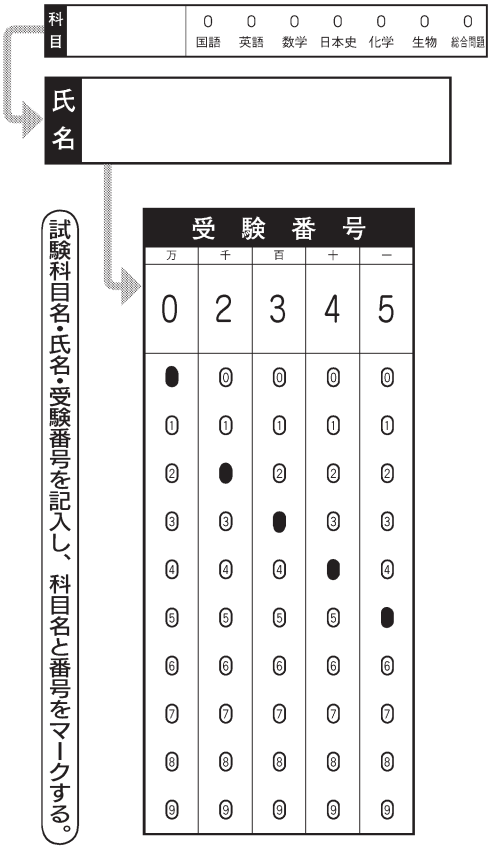
科目	ページ	科目	ページ
国　語	1 ～ 19	数　学	45 ～ 56
英　語	20 ～ 31	化　学	57 ～ 67
日本史	32 ～ 44	生　物	68 ～ 85

3．志望学科・科・専攻，試験科目

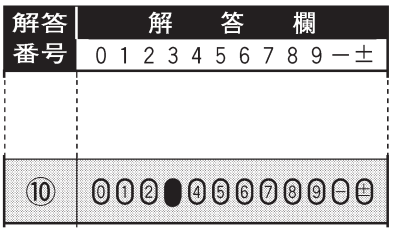
学科・科・専攻		試験科目
大学	児童学科	国語，英語，日本史，数学，化学※，生物※から２科目
	初等教育学科	
	栄養学科	
	管理栄養学科	国語，英語，数学，化学※，生物※から２科目
	服飾美術学科	国語，英語，日本史，数学，化学※，生物※から２科目 ◎心理カウンセリング学科，教育福祉学科は国語・英語のいずれか１科目を必ず選択すること
	環境共生学科	
	造形表現学科	
	英語コミュニケーション学科	
	心理カウンセリング学科	
	教育福祉学科	
	看 護 学 科	国語，数学，化学※，生物※から２科目
	リハビリテーション学科	国語，英語，日本史，数学，化学※，生物※から２科目
	子ども支援学科	
短大	保　育　科	
	栄　養　科	

※化学，生物の両方とも選択して２科目とすることはできません。

例１



例２



4．マークシートについて

(1)　解答マークシートは２枚あります。科目ごとに異なるマークシートを使用します。

(2)　解答番号１つに対し１か所マークします。

(3)　訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないようにしてください。

(4)　**２枚のマークシートの科目名欄にそのマークシートに解答する科目名を記入してください。さらに，右側の同じ科目名の上にあるマーク欄をマークしてください。**

(5)　氏名・受験番号を記入し，HB 鉛筆で番号をマークしてください。たとえば，０２３４５番では右上の例１のようになります。
　解答は右上の例２のように解答欄にマークしてください。たとえば，解答番号 ⑩ の問題に対して③と解答する場合，解答番号⑩の解答欄の③をマークします。

(6)　数学の解答欄への記入方法は裏表紙に記載してありますので，この問題冊子を裏返して読んでください。ただし，問題冊子を開いてはいけません。

国語

（解答番号は ① ～ ㉘ ）

一　次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】は、いずれも寺本剛『未来へ繋ぐ災害対策――科学と政治と社会の協働のために』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。解答番号は ① ～ ⑰ 。

【文章Ⅰ】

災害対策における理想と現実の間には多様な可能性がある。そして、災害対策が厄介な問題なのは、その無数の可能性のうちどれがよい答えなのかが決まっておらず、それを多様な市民による開かれた議論のなかで、災害に先だって探り当てていかなければならないからだ。とはいえ、そのための手がかりが何もないわけではない。多様な意見が存在し、すべての人が自分の意見をいえるのだとしても、そのすべてを反映できるわけではないし、また、なかには反映すべきでない意見もある。何が正解かは決まっていないかもしれないが、何が不正解かは大枠で特定できると考えられるのだ。それを見極めるには、やはり自分たちの弱さを自覚し、一人ひとりの命を平等に尊重するという原則に立ち返ってみる必要がある。

たとえば、ハザードマップの改定によって、ある地域がこれまでよりも災害リスクの高い場所として公表されると、その地域の地価が下落し、その地域の住民に不利益が及ぶ可能性があるという場合を想像してみよう。その地域の住民が地価下落による資産価値の低下を懸念してハザードマップの改定や公表をやめるよう訴えたとしたら、ア その声は受け入れられるべきだろうか。それは、よほどのことがないかぎり、退けられなければならないだろう。ハザードマップの情報が公開・コウシン(A)されていなければ、社会に属する人々をより高いリスクにさらすことに繋がるからである。トウガイ(B)地域の人々自身が災害リスクを受け入れることに同意していたとしても、リスクを回避するための情報を他人に与えなかったり、そのことで他人をより大きなリスクにさらしたりするのは倫理的ではない。また、自分たちの資産の価値を守るために仮にその地域の情報についてだけ公開を見合わせたとしても、その地域に引っ越してくる人やその土地を買おうと検討している人は、住む場所の災害リスクを選ぶことで自分自身の命や生活を守ることが十分にできなくなり、やはり倫理的に問題がある。

このことは倫理学的にはさまざまな切り口で理解できる。たとえば、最大多数の最大幸福の実現を倫理の目標とする功利主義的な倫理観からみれば、ハザードマップの非公開は多数の人々の命をより高いリスクにさらすことにつながるため容認できない。また、一人ひとりの人間の尊厳を認め、すべての人間に互いの尊厳を尊重することを求める義務論的な倫理観でも、

ハザードマップの非公開は、尊厳を持つ一人ひとりの住民の命をより大きな危険にさらす可能性を高めることであり、許されない。そして、災害対策の倫理原則として「弱い立場の人々への配慮」という観点からみても、ハザードマップの非公開は、人々をより脆弱（ぜいじゃく）な状態に放置するものであり、自分自身や他人が弱い立場に立つ可能性を考慮に入れない非倫理的な態度とみなされることになる。

このように、意思決定に参加する権利がすべての人にあるからといって、どんな要求でも受け入れられるわけではない。少なくとも災害対策においては、弱い立場に立たされる人々の命を守ることを妨げず、むしろそれに資するような声が優先されるべきである。

災害は緊急事態であり、そこでは一人ひとりの命を平等に救うための物的・人的資源が絶対的に不足する事態が容易に考えられる。そのような事態を想定して対処の仕方を考えておくことも、イ災害対策に取り組むうえで不可欠である。それは、一人ひとりの命を平等に守るという理想を追求するべく最大限の努力をしたうえで、それにつながる次善の指針を考えることを意味する。そして、その際に従うべき次善の指針は公平性だと考えられる。資源が限られており、すべての人を平等に救うことができないのであれば、せめてその資源を不当な偏りなく分配することが倫理的だと考えられるのである。

では、どのような分配の仕方が公平だろうか。何を公平性の基準とするかについては多様な考え方があり、どの基準を採用するかを決めることにも厄介さがつきまとう。しかし、これは逆にいえば、個別の価値観に左右されにくい、より抽象的な基準の方が望ましいことを意味している。たとえば、「年寄りよりも若者を優先すべきだ」とか「より有能な人を優先すべきだ」といったように個々人の属性（年齢、性別、能力、経済力など）を基準に優先順位を決めてしまうと、その基準を採用するべき理由や根拠、その背景にある価値観に賛同できない人々から反対の声が上がるのは容易に想像がつく。それゆえ、優先順位をつけるための基準としては、以上のような実質的内容をなるべく伴わず、多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準が採用されるべきだということになる。

このことは平常時の緊急事態において採用されているウトリアージのことを考えてみるとわかりやすいかもしれない。医療の現場では、平常時における緊急対応においても医療資源が限られる場合があり、その際にはできるだけ多くの命を救うために、症状の緊急度と重症度によって患者を分類し、治療やハンソウ（C）の優先順位を決めるトリアージが実施されている。ここでは、緊急の治療によって助かる見込みのある相対的に重い症状の人が先に治療を受け、死にかけている人、相対的に軽い症状の人は後回しにされる。すべての人の命を平等に救うことができない場合には、次善の倫理的基準として「できるだけ多くの命を救う」という基準が採用され、それに基づいて具体的に以上のような分類で優先順位が決められるわけだ。

この「できるだけ多くの命を救う」という基準は、「誰の命か」ということは度外視して、救える命の数だけを問題にしている。その点で、この基準は、実質的な内容の希薄な抽象的基準であり、異論も少なく、より公平な基準といえるだろう。また、「できるだけ多くの命を救う」という基準は、医療資源が限られているなかで、命の危険にさらされた人々を救う可能性を総体として高める目的で採用されており、目標としては、弱い立場の人々に配慮し、一人ひとりの人間の命を平等に尊重するというより高次の理想を目指し、完全ではないがそれに近づこうとする試みの一つと考えることもできる。

このように、災害時における資源の分配において優先順位をつける際には、できるだけ人々の属性に踏み込まない基準を採用した方が納得が得られやすいと考えられるのだが、その一方で、人々の属性によって物的・人的資源の分配に差をつけるのが望ましい場合もある。実際、新型コロナウイルス感染症対策としてワクチン接種が行われる際には、医療従事者、自治体の職員、高齢者などが優先されたが、感染症対策を含めた災害対策全般において、今後もこれに類する優先順位をつける必要が出てくる可能性は大いにある。そうした措置の是非や根拠についても、これまでの経験や専門家の知見に基づいて前もって議論し、社会全体で合意しておく必要がある。

その答えにはこれまたさまざまな可能性があり、それを探り当てるのは厄介な作業かもしれないが、それでも、そこには優先順位をつけるための妥当な倫理学的指針があると考えられる。それは*ジョン・ロールズが指摘した格差原理の考え方に則したものになるだろう。格差原理とは、最も不遇な人に最大限の恩恵が与えられる場合に社会的・経済的不平等は許されるとする考え方である。

ロールズは、この原理を社会的基本財（自由・権利・機会・資産・所得・自尊心など）を分配する際の原理として提案したのだが、これは災害時の問題にも転用できる。先にワクチンの例で示したような優先順位はそれ自体として考えるならば不平等なものであり、そのままでは容認できない。しかし、そのような不平等な分配によって最も不遇な立場にある人に最大限の恩恵がもたらされるならば、その限りで、資源の不平等な分配は認められる。特定の人々が優先的に財やサービスを得られるのは、与えられた状況においてその人々が相対的に弱い立場にあるか、あるいは弱い立場の人々を救うためにより大きな貢献ができるかのいずれかの場合ということになる。

感染症対策の事例で考えれば、感染リスクや感染後死亡率が高いという属性を持った人々が弱い立場の人々、感染症対策を支える医療関係者をはじめとしたエッセンシャルワーカーはそうした弱い立場の人々を救うために貢献できる人々であり、だからこそ、そうした人々は優先的に医療措置を受けられるようにすべきだということになる。もちろん、災害の種類やそれが

起こった状況に応じて、何が弱い立場（不遇な状態）かはさまざまであろう。そうしたことについて、あらかじめ議論して決めておくこともまた、必要な災害対策の一つである。

以上のようなロールズの格差原理の考え方もまた、弱い立場の人々を優先するという価値に基づいている。平等な配慮ができず、公平な配慮を試みるしかない場合でも、弱い立場の人々を優先するという考え方が捨て去られるわけではない。むしろ、この考え方に基づいた優先順位のつけ方が、より多くの人々に受け入れられ、正当性を持つことになると考えられる。もちろん、このことはこれ以外の基準に基づく優先順位が排除されることを意味してはいない。しかし、そうした基準は多くの場合、個人の属性に関わる実質的内容を伴うものになると考えられるため、特定の人々を不当に優遇ないし冷遇するものとみられかねず、多様な人々から賛同を得られない可能性がある。これでは厄介な問題をさらにこじらせることにもなりかねない。

こうした別の基準を採用するためには、「弱い立場の人々を優先する」というデフォルトの基準を覆すだけの十分な根拠が示され、それについて多くの人が納得できる説明が必要となるだろう。

【文章Ⅱ】

弱い立場に立たされた人を守る社会システムは、必然的に一人ひとりの命や生活を平等に尊重するものとなるはずである。というのも、それぞれの人が偶然に置かれている状況によって待遇に差をつける社会システムは、弱い立場の人を安易に見捨てる可能性があり、信頼できないからだ。

こうしたシステムをわれわれが望むのは、決して自愛の気持ちだけからではない。困っている他人を思いやり、助けようとする同情心や責任感がわれわれにはある。このような観点からみても、たまたま弱い立場に立たされた他人が切り捨てられることは許容できず、そうした人々をホウセツ[D]し、助ける社会システムをわれわれは支持するだろう。

弱い立場の人々を守るという以上のような理想は、最大多数の最大幸福を目標とし、災害時には「できるだけ多くの命を救う」ことを目指す功利主義的な倫理観とは異なる。功利主義は、社会全体の幸福を増大させるために、弱い立場に立たされた人を見捨てる可能性を原理的には排除していない。その点で、功利主義的な倫理観はわれわれが第一に追求すべき理想ではなく、その理想が実現不可能なときに採用される次善の規範である。

他方で、われわれが追求すべき倫理[オ]は、一人ひとりの人間を尊厳ある人格として尊重することを求める義務論的な倫理観と似ているが、厳密にいえばそれと完全に一致するものではない。一人ひとりの人間の尊厳を尊重するという考え方は、一人ひとりをかけがえのない存在として扱い、別の目的のための犠牲にしないことを意味しており、この点では先に述べた「一人ひと

りを平等に尊重する」という考え方と重なっている。しかし、本章が前提とする倫理は、これに加えて、弱い立場にある人々に対する同情心や責任感を重視し、そうした人々をまずは優先して救うべきことを強調する。

平常時においてわれわれは以上のような倫理を理想とし、その実現を目指して社会生活を営んでいる。そして、この理想は災害が起こったからといって捨ててよいものではなく、この目標を実現するために最大限の努力をすることがまず求められる。具体的には、災害によって社会システムがホウカイ[E]し、平常時の倫理が維持できなくなることを回避するべく、災害に強い社会システムを構築し、また災害から速やかに復旧できるよう備えなければならない。結局のところ、われわれが災害に対して倫理的に対応できたかどうかは、一人ひとりの弱さを十分に意識し、そうした人々を等しく守ることをどこまで真摯に追求して災害対策に取り組めるかにかかっている。このことからして、災害の倫理は本質的に災害対策の倫理だということになる。

（本文中に一部省略・改変したところがある）

（注）＊ジョン・ロールズ――アメリカの哲学者。

問1　二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つ選びなさい。解答番号は［①］～［⑤］。

A　コウシン　［①］

① シュココウを凝らした手料理。
② 勝負の行方にはコウデイしない。
③ コウイ室で制服に着がえる。
④ コウシツな文章を書く作家。
⑤ 大学で歴史学をセンコウする。

B　トウガイ　［②］

① ガイコツの標本を置く。
② 答えをガイスウで求める。
③ 不当な処分にフンガイする。
④ ガイハクな知識を誇る。
⑤ 夜道にガイトウがともる。

C　ハンソウ　［③］

① 新商品のハンロの拡大を目指す。
② 風を受けてハンセンが海路を進む。
③ 野菜の無料ハンプ会に参加する。

出典追記：寺本剛「災害対策の倫理」

④ 図表のハンレイで項目を確認する。
⑤ 倉庫から品物をハンシュツする。

D　ホウセツ　④

① 会場のセツエイを手伝う。
② 弱肉強食は自然のセツリだ。
③ 彼の考えはチセツだ。
④ セットウ事件の犯人が捕まる。
⑤ セツナ的な生き方を後悔する。

E　ホウカイ　⑤

① 氷山が大きくホウラクする。
② 清らかな花のホウコウが漂う。
③ 彼はホウガン投げの選手だ。
④ 丁寧にホウセイされた服。
⑤ 事実を知って頭がホウワ状態になる。

問2　傍線部ア「その声は受け入れられるべきだろうか」とあるが、ハザードマップの公表に関する次の(1)～(7)の「声」について、**受け入れられるべきではないもの**には①を、受け入れられるべきものにはその理由として最も適当なものを、後の②～⑤の中からそれぞれ選びなさい。解答番号は⑥～⑫。

(1) 私は危険地域の住人だが、ハザードマップの公表をやめたら、災害リスクの高い場所以外に住む多くの人の命も危険にさらすことになるんだぞ。　⑥

(2) ハザードマップの公表をやめたら、危険地域に住む私は、災害時に命をどう守ればいいかわからないじゃないか。それじゃあ困るよ。　⑦

(3) ハザードマップの公表をやめたら、災害時にどこが危険なのか確認できないじゃないか。私たちが去年被害を受けた地域の住人であることを忘れないでほしい。　⑧

(4) ハザードマップの公表をしたら、この地域に移住してくる人がいなくなるじゃないか。人口減少に歯止めをかけなければならないのに。　⑨

(5) ハザードマップの公表をしたら、危険な地域だと思われて人気がなくなってしまうじゃないか。将来家が売れなくなったらどうしてくれるんだ。　⑩

(6) ハザードマップが仮に間違っていたらどうするんだ。私たち地域住民からの意見も入れて少しずつ修正していくにしても、公表は少し待ったほうがいいんじゃないか。　⑪

(7) 危険地域といっても一様ではなく、危険度にもいろいろあるんだ。ハザードマップを公表すれば、避難を優先すべき地域がはっきりするのでは。　⑫

〈受け入れられるべきではないもの〉

①

〈受け入れられるべき理由〉

② 居住地という付帯情報に依拠せず、個人の命を尊重しているから。

③ リスクの高い場所の危険性を極力避ける権利を求めているから。

④ 災害時にリスクの高い場所の住人の命を危険から守ろうとしているから。

⑤ リスクに相対的な高低が発生することを踏まえているから。

問3 傍線部イ「災害対策」、傍線部ウ「トリアージ」とあるが、ある生徒が「災害対策」と「トリアージ」について次のように表にまとめた。これについて後の(1)・(2)に答えなさい。

●災害対策（災害時の物的・人的資源が絶対的に不足する事態における対応）

理想…一人ひとりの命を平等に守る

現実…すべての人の命を平等に救うことができない

←

次善の指針

・［　X　］

公平性の基準

・個別の価値観に左右されにくい、より抽象的な基準の方が望ましい

・多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準が採用されるべき

●トリアージ（平常時の緊急対応において医療資源が限られる場合に実施）

理想…すべての人の命を平等に救う

現実…すべての人の命を平等に救うことができない

←

次善の倫理的基準

・できるだけ多くの命を救う　→　トリアージを実施する

公平性の基準

・症状の緊急度と重症度によって患者を分類する

＝［　Y　］

●両者に共通する理念＝［　Z　］

(1) 空欄［X］・［Y］に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から選びなさい。解答番号は［⑬］。

① X　非常事態に備えて十分な資源を確保する
　Y　多くの命を救うために人の命に優先順位をつける
② X　個々人の属性を考慮して公平に資源を分配する
　Y　誰の命かは度外視して救える命の数だけを問題にする
③ X　限られた資源を不当な偏りなく分配する
　Y　症状が重い人の命を優先する
④ X　より多くの人が納得できる基準に沿って資源を分配する
　Y　人々の命を救う可能性を総体として高める

(2)　空欄 Z に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は ⑭ 。

① 緊急時においては何が優先されるべきかを考え、その優先度に応じた災害時向けの倫理を確立する
② やむを得ず優先順位をつけるために、多くの人がなるべく抵抗なく受容できる基準を採用する
③ 簡単には解決できない問題が起こったときに、何を犠牲にするのが倫理的かを予(あらかじ)め決めておく
④ 緊急時であることを理由に理想を追求することをあきらめるのではなく、平常時の倫理をできる限り維持する
⑤ 弱い立場の人々に配慮し、一人ひとりの人間の命を平等に尊重するという、より高次の理想を求めない

問4　傍線部エ「優先順位をつけるための妥当な倫理学的指針」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は ⑮ 。

① 災害時における資源の分配においては、個々人の属性に踏み込まない基準を採用した方が納得を得られやすいので、災害の種類や状況に応じて、また専門家の知見に基づいて、優先順位に関する社会的合意を図るべきである。
② ジョン・ロールズの格差原理の考え方は、弱い立場の人々を優先するという価値に基づいているが、「弱い立場」の基準自体が普遍性を持つものではないため、特定の人々を不当に優遇したという反感を持たれることも否定できない。
③ 不平等な分配は本来避けるべきだが、優先順位をつける必然性に迫られたときには、相対的に弱い立場にある人々と、弱い立場の人々を救うために貢献できる人々を優先することが正当性を持ち、より多くの人々に受け入れられる。
④ ジョン・ロールズが指摘した格差原理の考え方によると、最も不遇な人に最大限の恩

恵が与えられるべきだが、新型コロナウイルス感染症対策においても格差原理の考え方が転用され、優先順位をつけることが多くの人々に承認された。

⑤ 弱い立場の人々に配慮しないのは非倫理的な態度とみなされるので、災害対策においても、弱い立場に立たされる人々の命を守ることが優先されるべきであり、いかなる場合でも弱い立場の人々を基準に優先順位をつける必要がある。

問5　傍線部オ「われわれが追求すべき倫理」とあるが、これについて六人の生徒が話し合った。【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】の内容に即した発言を二つ、次の①～⑥の中から選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は ⑯ ・ ⑰ 。

① 生徒A――「われわれが追求すべき倫理」は、「義務論的な倫理観」と似ているとある。災害時でも「一人ひとりの人間を尊厳ある人格として尊重すること」が最も優先されるべき倫理観であるはずだから、きっとこれが「われわれが追求すべき倫理」だよ。

② 生徒B――「義務論的な倫理観」は「一人ひとりの人間の尊厳を尊重する」という考え方で、誰かを別の目的のための犠牲にしないことを意味するとも書いてあるよ。だったら、災害時には「できるだけ多くの命を救う」ことを目指す「功利主義的な倫理観」とも同じだよ。

③ 生徒C――「功利主義的な倫理観」は「われわれが第一に追求すべき理想ではなく、その理想が実現不可能なときに採用される次善の規範」とあるよ。つまり最大多数の最大幸福を目標とする「功利主義的な倫理観」は、弱い立場の人々より社会全体の幸福を優先するんだよ。

④ 生徒D――「功利主義的な倫理観」は、緊急時にやむを得ず適用される「次善の規範」なんだね。そうか、災害が起こったときに弱い立場の人々を優先するというのはすでに共有されているから、それ以外の人々の優先順位を決めることが「われわれが追求すべき倫理」なんだ。

⑤ 生徒E――弱い立場に立たされた人々を「助ける社会システムをわれわれは支持する」とあるから、これが「われわれが追求すべき倫理」だよ。平常時はもちろん、緊急時にも弱い立場にある人々を優先して救えるように、真摯に災害対策に取り組むための倫理じゃないかな。

⑥ 生徒F――緊急時に弱者を優先して救えれば、「次善の規範」が適用される場面が少なくなるね。同情心や責任感だけでは、自分の命が脅かされた場合に心もとないから、いざというときに人の善意に頼らなくてもよい、災害に強い社会システムを構築すべきだと筆者は言いたいんだね。

二　次の【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】は、いずれも砂原浩太朗『黛家の兄弟』の一節である。【文章Ⅰ】の場面は、江戸時代のある藩で代々筆頭家老をつとめる黛家の三男・黛新三郎が、同じ剣術道場に通う由利圭蔵を誘って自家が催す花見の場に向かっているところである。圭蔵は自分の身分の低さから初対面である黛家の者に会うことに気後れを覚えている。【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】より後の場面で、新三郎が父から自分の縁談について聞かされるところである。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。解答番号は ⑱ ～ ㉘ 。

【文章Ⅰ】

およその場所は次兄から告げられていたが、こう人が多くては、さがすだけでひと苦労だった。町人と武士が入りまじり、桃色の天蓋を見上げながらそぞろ歩いているものだから、五、六歩もあるけば足が止まってしまう。この季節にしては日ざしも強めで、首すじのあたりにわずかな痛みさえ覚えるほどだった。

圭蔵は落ち着かなげに視線をさ迷わせている。桜を眺めるどころではないらしかった。

――やはり、わるいことをした。

いっそ兄たちとは、はぐれたままでもよい、と思ったとき、

「兎――」

太く低い声が、すぐそばから投げかけられた。どこかしら似ているということらしいが、その渾名で呼ぶものは、ひとりしかいない。

振り向くと、ひときわみごとな桜樹の陰から、みっしりと筋肉に覆われた姿が一歩踏みだしてくる。今しがた通りすぎたばかりの木だが、うっかり見過ごしていたらしい。

「由利も来たか」

壮十郎が鷹揚に笑うと、圭蔵はあわててこうべを下げた。

「その、本日はお招きいただきまして」

「礼をいうほどの催しではない」桜の幹に寄りかかったまま圭蔵のことばを遮ったのは、栄之丞だった。「ぶらりと歩いて桜を眺めるだけだ」

話し方がそっけないのは長兄の悪い癖だと新三郎は思っている。すらりと痩せた体つきで、秀麗といっていい容貌をしているから、かえって冷ややかに見えてしまうのだった。必ずしもそうでないことを新三郎は知っているが、どれほどの者にそれが分かっているかは疑わしい。

「どうだ由利、あとで一手やらぬか」

歩きだしながら、壮十郎が額を寄せてささやいた。圭蔵は目を泳がせ、唾を呑みこむ。

「と申されますと」

次兄はことさら大きな笑い声をかえすと、

「これに決まっておろうが」

圭蔵が負った竹刀をぽんぽんと叩いた。救いを求めるような眼差しを向けられ、新三郎は思案げな表情で眉を寄せる。

新三郎たちは一刀流の峰岸道場に通っているが、壮十郎は富田流の影山道場で高弟につらなる身だった。由利圭蔵も他流にまで知られた剣士だから、興味を惹かれたのだろう。あるいは、最初からそのつもりで声をかけたのかもしれぬ。

「小兄上――」

思い切って口をひらくと、

「今日はやめておけ」

栄之丞の声が押しかぶさる。「桜の下で立ち合いなど、風流すぎる。おまえには似合わん」

いくぶん物足りなげな表情を浮かべたものの、次兄はそれ以上、食い下がってこなかった。圭蔵がほっとしたような微笑を見せる。

一行は城下と反対の方角へ、ゆったりと歩みをすすめた。桜並木は尽きる気配もなく、散りかかる花弁が時おり頬や鬢のあたりをかすめる。杉川のおもてにも、二枚三枚と花びらが吸いこまれていった。

「あの、ご無礼とは存じますが」

ふいに声をかけられたのは、四半刻ばかり歩いて、人ごみがまばらになってきたころだった。並木のあいだに立って、武家の女中と思しきはたち前後の女がこちらを見つめている。

新三郎が応えようとするまえに、圭蔵が進みでて女に低頭した。相手もかまえることなく礼を返しているのは、おのれと同じ使用人だと思ったらしい。圭蔵もとっさに軀が動いてしまったのだろうが、やはりすまぬような心もちに見舞われてしまう。同門として気兼ねない付き合いをしているつもりだが、世間がそう見てくれるとはかぎらなかった。

「黛様のご兄弟では」

女中が臆する風もなく告げた。うすい唇に、顎のほくろが目につく。うつくしいと言えぬわけでもないが、どこか釣り合いのわるい顔立ちだった。

圭蔵がこちらを振りかえると同時に、

「いかにも左様だが」

壮十郎が磊落な調子でこたえる。女中は表情をやわらげると、背後に視線をすべらせた。

「りく様でございます、黒沢の」

そのときになってようやく気づいたが、桜の幹へ寄り添うようにしてあざやかな朱の小袖をまとった女がたたずんでいる。わずかに顎がとがってはいるものの、瞳はくっきりとつよく、着物の色にまけぬ華やかな面ざしだった。

黒沢家は八百石で大目付のお役をつとめているが、藩祖の末子につらなる家であるため、家中では別格のあつかいを受けていた。当主の織部正は峻厳な人柄で聞こえ、藩士の行状を取りしまるお役とあいまって一目おかれている。

長兄と次兄がそろって黙礼し、おくれて新三郎たちも倣う。

他家の女と顔を合わせる機会などそうそうないが、黒沢のひとり娘であるりくは昔から知っている。兄弟の父・清左衛門と織部正が親しい間柄で、家族ぐるみといってよい付き合いを続けているのだった。いまは幼いころほど頻繁な往き来はないが、年に一度は、いずれかの屋敷で月見の宴など催すことがある。

圭蔵はようすが呑みこめぬ体でそわそわしているものの、目がりくの方へ吸い寄せられていた。新三郎は洩らしそうになった笑声を、いそいで押しこめる。

――まあ、びっくりするくらい、きれいだからな。

とはいうものの、おのれはりくの貌立ちに惹かれていなかった。美しいことは間違いないが、整いすぎて息が抜けない。そういう意味では、栄之丞ともどこかしら似通っている気がした。

【文章Ⅱ】

「それで、そなたの件だが」父が伏せぎみにしていた額を起こす。新三郎は胸がざわめくのを覚えた。「相手は、黒沢のりく殿だ」

とっさに声をうしなう。なぜか、少女といってもいい頃の面影があたまの隅にちらついた。自分は母を亡くしたばかりだったから、りくは十歳ほどだったろう。今よりもふっくらした顔立ちが記憶にのこっている。栄之丞や圭蔵の姿がそれにまじり、胸に伸しかかってくるようだった。

「いやか」

清左衛門がゆっくりと唇をひらく。平板な口調ではあったが、気をそこねた様子はなく、ただの問いかけに聞こえた。われにかえって、唾を呑みくだす。

「わたくしの気もちは、かかわりないものと思いますが」

声が自分でもふしぎなほど皮肉めいている。父は今いちど額のあたりを押さえながら、口の端を苦くゆがめた。

「むろんそうだが、よろこんで縁づくに越したことはない」

「はい、たしかに」かすかに頬をゆるめる。「いやというより、おどろいております」

それは正直なところだった。どちらかといえば、りくのことは苦手だが、おのれのような若輩でも、武士の縁組は家と家のむすびつきと心得ているから、好ききらいは意味を持たぬ。齢はふたつ上だが、これもよくある話といえた。栄之丞に託された書状のことだけが、背筋

のあたりにわだかまっている。

「なぜ小兄上でなく、わたくしなのですか」

ふと思いついて問うた。清左衛門が、瞳に複雑な色をただよわせる。

「先方の所望でな。はっきりとは言わぬが、壮十郎は大目付のお役にそぐわぬと思うておるのだろう」

藩内でも遣い手として知られる次兄だが、筆頭家老の家に生まれた者として、いささかその腕を持て余しているのも事実だった。剣術指南の家はおおむね百石前後だから、養子に行くとしても家格が合わぬし、いま現在跡とりをもとめている道場もなかった。柳町*あたりでD とぐろを巻いているのも、そうした苛立ちが根にあるからかもしれぬ。たまさか帰った折に接するかぎりは特段あやうい気配も感じないが、黒沢織部正としては大目付という役目がら、懸念のすくない新三郎をえらんだのだろう。下拵えはとうに終わっているらしかった。

――とはいえ……。

あたまのなかがくすんだ色に塗りつぶされてゆくようだった。父がしずかな眼差しでこちらを見つめている。尋ねかえすまでもなく、ことわる道がないのは分かっていた。

胸苦しさに耐えかね、ふかく息を吸いこむ。緑の香はひときわ濃さを増していて、新三郎は咳きこみそうになるのをかろうじてこらえた。

玄関先まで出てきた圭蔵はいぶかしげに首を傾けたが、

「めずらしいな、こんな時刻に」

とだけいって草履を突っかけた。屋敷のうちから、おびえたような視線がいくつかこちらへ注がれるのを感じたが、圭蔵が軋み音をあげて戸を閉めたため、すぐに見えなくなる。

夕日が雲の襞を炙りだし、かたむいた光が組屋敷の屋根へ落ちかかっている。朱色のきらめきがあたりに散らばり、圭蔵の顔もほの赤く浮きあがっていた。背を向けて歩きだすと、だまってついてくる。

すこし南に進むと、小川の脇に竹林が広がっていた。あるかなきかの風にのって、湿った土の匂いと竹のそよぐ音がただよってくる。

「昼間、父に呼ばれてな」

足を止め振りかえりざま発すると、圭蔵が口のなかで、うむ、とだけいった。

「――婿入りの話だった」

オ あえて直截に伝えたのは、そうしないと切りだせなくなると思ったからである。道々、あたまのなかで幾度も繰りかえしてきたことばだった。

「それは……」

圭蔵はつかのま絶句したが、ややあって背すじをのばすと、
「祝着至極に存ずる」
あらたまった口調になって低頭した。あわててそれに応えていると、面をあげた相手が、心もとなげな視線を向けてくる。
「道場はやめるのか」
「……そういうことになる、と思う。今すぐじゃないが」
そうか、とつぶやいて、圭蔵がまなざしを落とす。吐息まじりにささやくような声を洩らした。
「柳町に行けなかったな」
諦めと自嘲の入りまじった響きである。押し黙っていると、圭蔵が突然なにかに気づいたようすで、
「そういえば」
といった。「どこの家に入るのか、まだ聞いてなかったが」
「ああ」
口ごもったが、むしろ言いだしてもらえてありがたい、と思った。瞼を閉じて、ひといきに言い放つ。
「黒沢だ――その、花見のときに会った」
じぶんでもはっきり分かるほど、声が揺れていた。目をひらくと、圭蔵がぽかんと口をあけ、焦点の合わぬ視線をこちらへ向けている。じき我にかえった体で失笑をこぼした。
「なるほど。おれに、すまないと思ってきたわけだ」
「まあ、そういうことになるかな」
鬢のあたりを掻きながら告げると、圭蔵が今いちど声をあげて笑った。呆気にとられているうち、いくらなんでも気のまわしすぎだ、といって息をはずませる。
「さすがに、あの人をどうこうできるなどとは思っていない。どうせ誰かのものになるなら、おまえでよかった」
「ほんとうか」
「こんな、つまらぬ嘘はつかん」
新三郎は肩の力を抜いて、こうべを上げる。竹林は空をさえぎるように広がっていたが、ところどころ洩れる茜色の光がつよく、薄暗さは感じなかった。
「よかった」
押しだすようにつぶやく。圭蔵が、子猫でも見守るふうな顔つきになって目を細めた。
「近いうち、酒でも呑もう。送別の宴だ」

元気でやれよ、と言いながら、さりげなくおもてを逸らす。それを追うようにして、新三郎は声を発した。

「そのことだが」

圭蔵がぴくりと肩をすくめ、こちらへ目をもどす。促されるような心もちになって、しぜんと言葉が引きだされた。

「いっしょに来てくれないか」

「……すまん、どういうことかな」

本気で戸惑っているらしい。藍色のにじみはじめた大気のなかで、困惑をたたえた面もちがはっきりとうかがえた。

婿入りに際しては、黛家からも数名が側仕えとして黒沢へ入ることになるらしい。そこに圭蔵をくわえてもよい、と父から言い渡されたのだった。会わせたことはないが、新三郎が時おり話に出すので、名前くらいはおぼえていたのである。兄たちもそうだが、清左衛門も目にあまりさえしなければ身分の違いがどうのとうるさく言うほうではない。

「遣い手と聞くゆえ、なにかの役に立つ折もあろう」

父はあっさりといった。三男坊だから甘くなっているのも大きいだろうが、ようは軽輩に関心などないのだということは分かっている。

りくの件もあるから切りだすのにためらいはあったが、打診しないという道すじは浮かばなかった。あれこれ考えるのにも疲れ、ともかく当人に諮ってみようと出向いたのである。

「おれを召し抱えようということか」

仔細を聞き終えると、圭蔵がひとりごつようにいった。気でもそこねたかと思い、

「むろん、いやなら断ってくれていいんだ。いま返事しろというわけでもない」

とりなすふうに告げると、間をおかず声が返ってくる。

「いや、受けるよ」

「えっ」

そうなればよいと望んではいたものの、これほどすぐ答えが聞けるとは考えていなかった。圭蔵はいくぶん面映げな色をただよわせながら言う。

「いずれはどこかで身を立てなきゃならない……それに」

ことばを切り、おもむろに背を向ける。そのまま、じぶんへ言い聞かせるように発した。

「どうせ友垣でいられなくなるなら――」

「おい、よせっ」

とっさに一歩踏み出したが、それ以上は動けなかった。おもい幕で押しとどめられたように、立ちつくして圭蔵のうしろ姿を見守る。厚い肩が揺れ、ふかく息を吐いたのだと気づいた。

「どんなかたちでも、お前のそばにいる……そうしたいんだ」

返すべきことばを見つけられなかった。正面からあふれるほどの夕日が差し、圭蔵の広い背を浮きあがらせる。じぶんとかわらぬ丈だったはずが、ずいぶん大きくなったように感じていた。

（注）＊立ち合い――試合をすること。
＊四半刻――約三十分。
＊栄之丞に託された書状――以前、新三郎が栄之丞から預かり、りくの屋敷に届けた、りくへ宛てたと思われる手紙。
＊柳町――歓楽街。

問1　二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つ選びなさい。解答番号は⑱～㉒。

A　鷹揚に　⑱
① にこやかに
② 威厳ありげに
③ おっとりと
④ おおげさに
⑤ 偉そうに

B　臆する　⑲
① 遠慮する
② 躊躇（ちゅうちょ）する
③ 卑屈になる
④ いやがる
⑤ 物怖（ものお）じする

C　磊落な調子で　⑳
① ぞんざいに
② 堂々として
③ 快活に
④ 大きな声で
⑤ 親切そうな感じで

D　とぐろを巻いている　㉑
① 遊んでいる

② 周囲を脅している
③ 酔っぱらっている
④ 帰らないでいる
⑤ 何かをたくらんでいる

E　おもむろに　㉒

① ゆっくりと
② いきなり
③ 予期せず
④ ぎこちなく
⑤ のんびりと

問2　傍線部ア「小兄上――」とあるが、新三郎は何をしようとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は㉓。

① 影山道場で高弟につらなる身の壮十郎が、最初から名の知られた剣士である圭蔵と手合わせするつもりで花見に誘ったと知り、抗議しようとしている。
② 花見の場で刀を抜くだけでも物騒なのに、友人の圭蔵と兄を立ち合わせるわけにはいかないので、まずは壮十郎の真意を問いただそうとしている。
③ 壮十郎の提案に意表を突かれて呆気にとられたが、勝手に他流試合をすれば問題になることに気づき、何としてもやめさせようとしている。
④ 冗談とも本気ともつかない壮十郎の言葉に腹を立て、初対面の相手に立ち合いを申し込むという兄の無茶をたしなめようとしている。
⑤ 自分よりも身分が高い壮十郎の申し出を断れずに圭蔵が困っていることを察して、圭蔵の代わりになんとか断ってやろうとしている。

問3　傍線部イ「圭蔵が進みでて女に低頭した」とあるが、このときの圭蔵の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は㉔。

① 花見に誘ってもらったうえに、壮十郎への対応に困惑していたところを栄之丞に助けられたので、黛兄弟の役に立たなければならないと考えている。
② 声をかけてきたのが武家の女中らしい女性だったので、自分が同じ場にいる以上、新三郎に直接対応をさせるわけにはいかないと考えている。
③ 新三郎は友人として付き合ってくれているが、世間の人から見れば筆頭家老の御曹司と従者のようなものなので、取り次ぎをするのは自分の役目だと感じている。
④ 女性とは言え、見知らぬ人間が通りすがりに声をかけてきたのに何の警戒もしないわけにはいかず、とっさに新三郎の盾になろうとしている。

⑤ 新三郎は圭蔵を同門の友人として対等な立場で遇しているが、圭蔵自身は身分をわきまえており、女には自分が使用人に見えたのだと察している。

問4　傍線部ウ「新三郎は洩らしそうになった笑声を、いそいで押しこめる。」とあるが、このときの新三郎の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は㉕。

① 家族ぐるみの付き合いをしていたために幼いころは頻繁に顔を合わせていたりくと、久しぶりに会えたのがなつかしく思わず笑みがこぼれている。

② 知らない女性と顔を合わせた圭蔵がそわそわしている様子がおかしかったが、この場で女性の説明をするのは場違いだと思い我慢している。

③ あざやかな朱の小袖にも負けないほどに華やかでびっくりするほど美しいりくに、自分がまったく惹かれないことを不思議に思っている。

④ りくの美しさに目を奪われ、落ち着かない様子の圭蔵をほほえましく思ったが、笑い声をあげて圭蔵を茶化すようなことはすまいとしている。

⑤ りくは間違いなく美しいのに息が抜けないようでつい警戒してしまうところを、栄之丞と似通っていると考えている自分を不思議だと考えている。

問5　傍線部エ「下拵えはとうに終わっているらしかった。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は㉖。

① 新三郎の全く気がつかないうちに、先方による結婚前の身元調査が終わってしまっていたと思われるということ。

② 壮十郎と新三郎のうち、将来の大目付としてどちらが無難であるか見定められている最中だと思われるということ。

③ 新三郎とりくの結婚話が、新三郎の知らないうちに両家の間で着々と進んでいたと思われるということ。

④ りくのことは好きではないのに、二人が結婚することはすでに両家の間で了承済みになっていると思われるということ。

⑤ 剣の遣い手でありながら、筆頭家老の家に生まれた壮十郎はその才能を持て余していると思われるということ。

問6　傍線部オ「あえて直截に伝えた」とあるが、このときの新三郎の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は㉗。

① 花見のときに圭蔵がりくに見とれていたことを思い出し、自分とりくとの縁談が持ち上がっていると知れば圭蔵がショックを受けるのではないかと考えたが、遠回しに話す

よりも単刀直入に話した方がお互いのためによいだろうと考えている。

② 圭蔵が花見のときに会ったりくに思いを寄せていそうだと考え、縁談を伝えることにためらいがあったが、それ以上に側仕えとしていっしょに黒沢家に入ってほしいと望むことは友人関係の変化を意味するため、言いにくいこともきちんと伝えようと思っている。

③ りくとの結婚は正直気が進まないが、武士の縁組は家と家のむすびつきである以上、受け入れるほかはなく悩んでも仕方がないので、縁談のことは早く圭蔵に伝えて、側仕えとして圭蔵を召し抱えるという話を進めたいと考えている。

④ 花見のときに圭蔵がりくに好意を持ったことは分かっていたものの、身分の違いからりくが高嶺（たかね）の花であることは自覚していると踏んでいたが、新三郎の側仕えとなる話は圭蔵を傷つけるのではないかと考え、言いだしにくくなっている。

⑤ 新三郎がめずらしく遅い時刻に家まで訪ねてきたことで、何やら大事な話があるらしいと見当をつけている圭蔵には、持って回った言い方をして時間をかけるよりも、正直に事情を打ち明けて、結婚後に協力してもらう方がいいと考えている。

問7　この文章の登場人物について五人の生徒が話し合った。**【文章Ⅰ】**・**【文章Ⅱ】**を通して読み取れる人物像の説明として**適当でないもの**を一つ、次の①～⑤の中から選びなさい。解答番号は ㉘ 。

① 生徒A――長兄の栄之丞は、立ち居振る舞いも堂々としているし、壮十郎のたしなめ方も堂に入っている。弟たちも敬意を払っていることから、黛家の嫡男として次期筆頭家老になるにふさわしい人物だね。

② 生徒B――次兄の壮十郎は、圭蔵に立ち合いを申し出て顰蹙（ひんしゅく）を買ったり、遊び歩いているため大目付の器ではないと判断されたりと、家柄に合わない人物のようだね。家も継げず剣で身を立てることもできないことで鬱屈しているのかな。

③ 生徒C――父親の清左衛門は、家長としての風格がありながら縁談を一方的に命令するのではなく、新三郎の気持ちを聞いているところに器の大きさを感じたな。黒沢家との付き合い方にしても、きっと人望があるんだろう。

④ 生徒D――新三郎は身分の違いを知りつつも圭蔵と対等に付き合っているし、圭蔵が使用人のような行動を取ったときには申し訳なく思っている。温厚で偉ぶらない人物で、次期大目付として婿入りするのにふさわしいね。

⑤ 生徒E――圭蔵は新三郎との身分の違いを意識する思いと彼との友情の間で複雑な思いを抱えてきたんだろうね。そのなかで自分の可能性や物事の優先度を判断する自律性もある人物なんだな、と思ったよ。